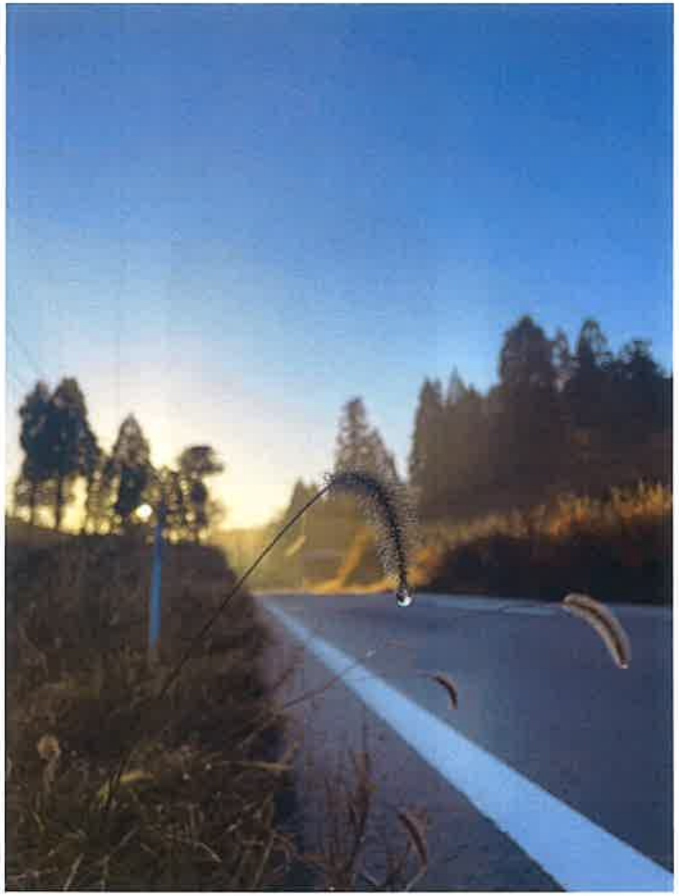
令和五年十二月二〇日　加茂法話会

いのちに親しむ、坐禅に親しむ

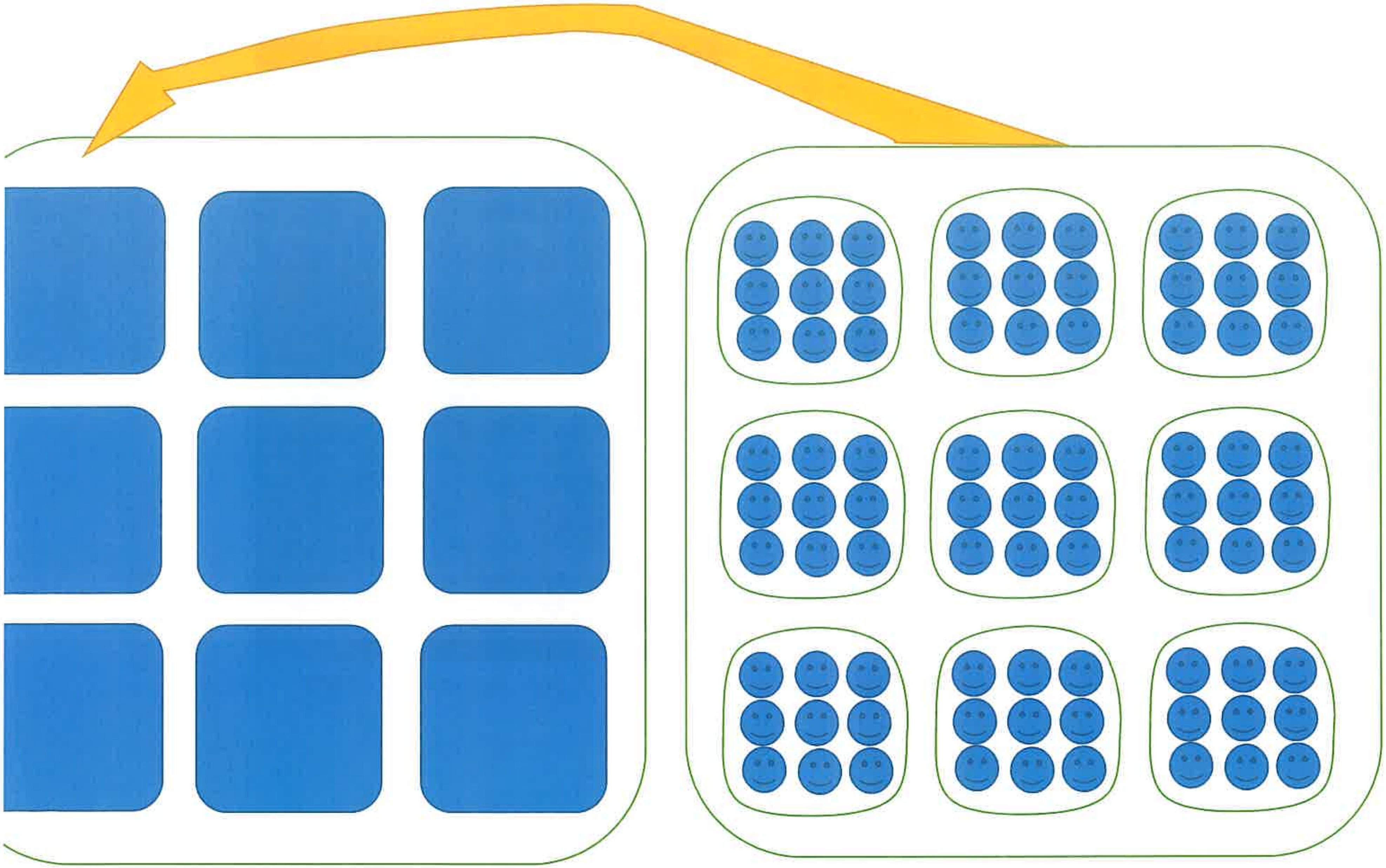
柏崎市花栄寺　九里悠禅



十二月のある朝、花栄寺の近くで撮影

世の中は　何にたとへん
水鳥の　はしふる露に　やとる月影
（『傘松道詠』また「梅花流詠讃歌」『無常御詠歌』）
（世の中は、何に譬えることができるだろうか。それはちょうど水鳥が池に来て、獲物を捕らえて飛び立つときにくちばしから零れ落ちる水滴のようなものだ）

【参考】
人の悟りを得る　水に月の宿るが如し　月濡れず　水破れず
広く大きなる光にてあれど　尺寸の水に宿り
全月も弥天も　草の露にも　一滴の水にも宿る
悟りの人を破らざること　月の水を破らざるが如し
人の悟りを罣礙せざること　滴露の天月を罣礙せざるが如し
（『正法眼蔵』「現成公案」　注：区切りは九里）

歌の表の意味・・・「無常」この命と世の中のはかなさ
歌のもう一つの意味とは？

「限りある命を慈しんで生きて行こう」＝坐禅の生き方
いわゆる仏祖の坐禅とは・・・衆生を忘れず、衆生を捨てず、乃至昆虫にも常に慈念をたまい誓って済度せんことを願い、あらゆる功徳を一切に廻向するなり
（『宝慶記』「㉚大悲を先とする坐禅」池田魯参、大東名著選十六、一〇七頁）